
patient&school nurse
R18
adult only
保健室の常連・病弱女子「患者さん」
×
自己肯定感の低い保健医「先生」
患者さんと先生
～幕間にやり直しを～
a.m.
御膳
創作男女×TL

患者さんと先生

～幕間にやり直しを～

a.m. 御膳

思春さん

創作男女xTL



前回のあらすじ

病弱な女生徒「笹五位 月子」は入学直後に
保健室の先生である「石流先生」に助けられる。
先生に不信感を抱いていた月子だが、
2度も助けてもらったことにより信頼を置くようになった。

2人はある日、お互いに「自傷行為をしている」という秘密を知り、
急速に接近していき惹かれ合っていく。
先生は今まで隠していた秘密を月子に受け止めてもらったことにより、
月子に理想を抱くようになり、夢にまで見るようになった。
そして、夢と現実の境目が分からなくなった先生は、月子に強引に迫り――。

「患者さん」と「先生」の関係が始まる。

pixivにて前作
「患者さんと先生 幕開け編」の
一部ページ(約20P)が読めます→



先生

自己肯定感の低い保健医。
30歳独身。メンタル極悪
ハードリストカッター。
基本的に他人には優しい。



患者さん

保健室の常連・病弱女子。
「患者さん」は先生が付けたあだ名。
ひょんなことから先生と
付き合うことになった。

第一印象は

ヘラヘラした人



でも本当は

思いやりのある
慈悲深い人で



自分を大事に
できない人


はぁ…
わたし…
ほんと
ダメだな

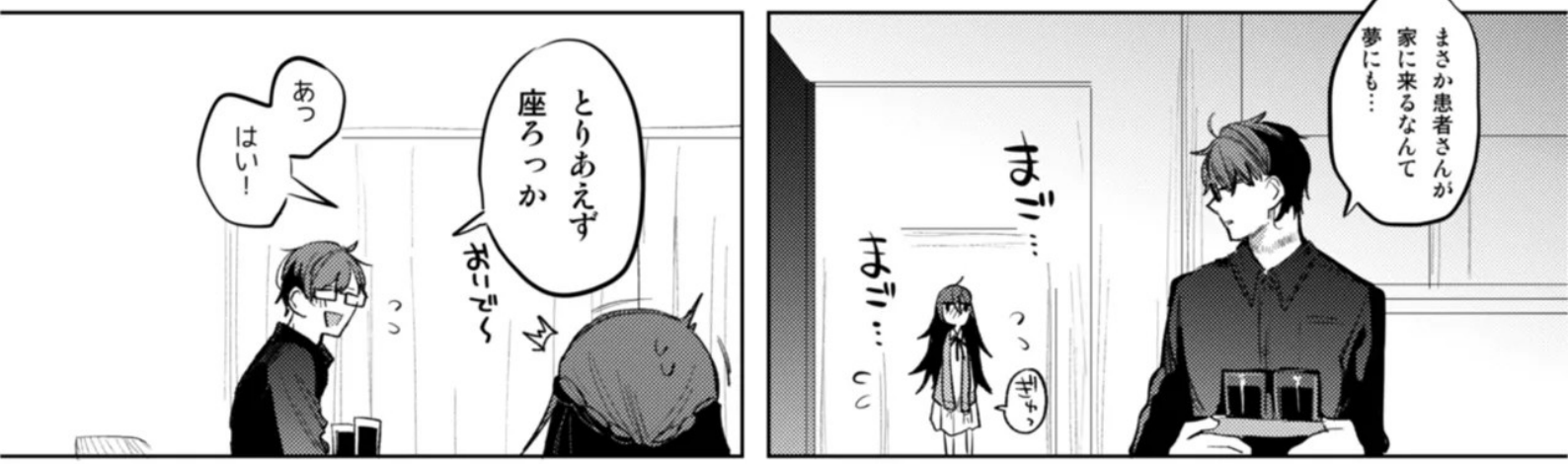

プシー
よりによって
保健室の先生…
なんで好きに
なっちゃったん
だろう


でも
土日にでもゆっくり話そうか？
学校だと落ち着いて
話せないしね


ピンポーン

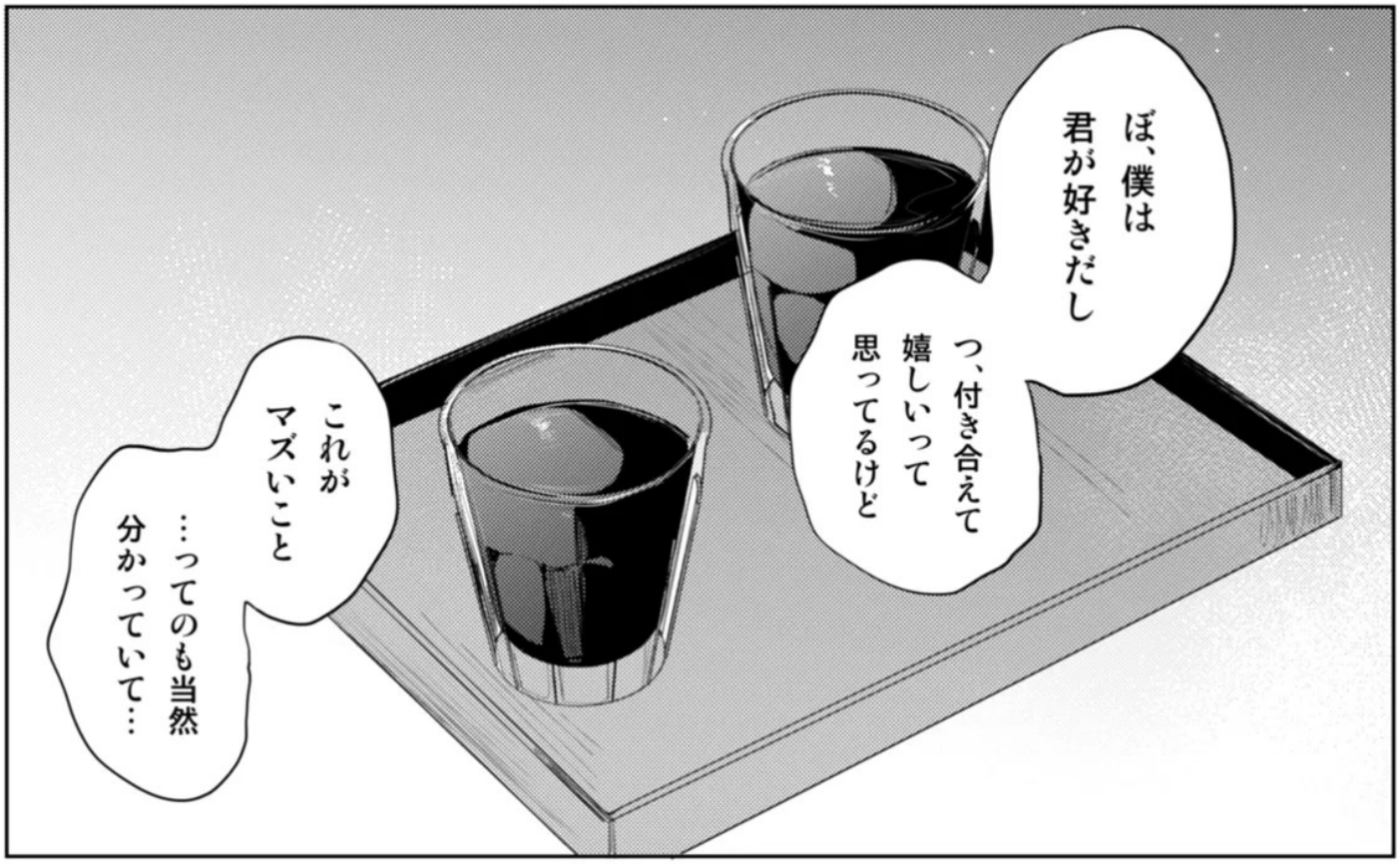

それでも
僕の家に来て
もらってもいい？


ガチャ
いらっしゃーい
お
おじゃまします…
私服だ
適当に靴置いちゃっていいよ～
あ、お茶でいい？
おっお構いなく
いや～女の子なんて来たことないから緊張するな～
私
はじめて男の人の家に来た…かも
。。


まさか患者さんが家に来るなんて夢にも…
まジ…
まジ…
ギチッ
とりあえず座ろっか
おいで〜
あっはい！


先生の匂いがする…
そういえば
ソワ
ソワ


話そうって言われてたけど
一体何を…？
もしかして別れる…？
早…
ドッ
ドッ
ドッ
ドッ
え
ええと
♡200回/分


ぼ、僕は
君が好きだし
つ、付き合えて
嬉しいって
思ってるけど
これが
マズいこと
…ってのも当然
分かっていて…


その上
君に酷いこと
をしたのに
付き合う
なんて…
ぴく、
いいんです


私がいいから
いいんです
酷いことを
されたなんて
思ってもいません
起こった
ことも
この関係も
絶対に誰にも
言いません
…だって


私だって
先生のことが好きですから！


それに




ぷちっ


き、今日は
ちゃんと準備してきたんですよ…？
!?


先生が私に
酷いことをした
と思うなら
最初から
やり直し
ませんか…？


もしかして
僕に見せるために
かわいいの
選んできたの？
ぎゅ
かぁぁ
は、はい…
はじめての
時くらい
かわいいの
着けておけば
よかった…って
後悔
してて…
後悔…


この前は
ごめんね
優しくして
あげられなくて


出血まで
させて…
僕も後悔
してる…


そ、それは
はじめて…
だったから
しょうが
ないかと…
でも…
たぷん…


あ


そ、相談があるんですけど
何？
実はあの後
血が止まらなくて…
えっ!?
本当にごめん…


あっでも
わた
わたっ
痛みはあまり感じなかったので大丈夫なんですが…


もしかして私
狭い？のかなって

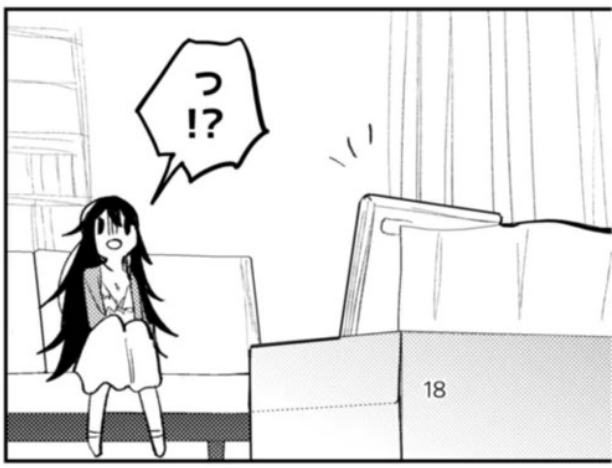

でもよくわかんなくて…
今日もしかしたら血が出ちゃうかも…
ソファ汚しちゃいそうでちょっと心配…

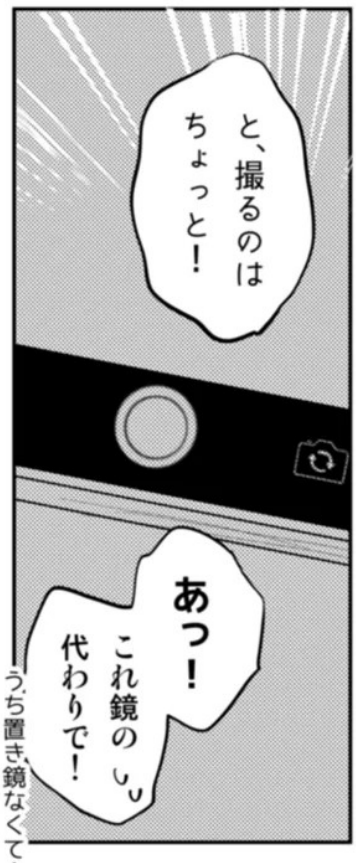

……


相当
無理矢理
入れたんだな
僕

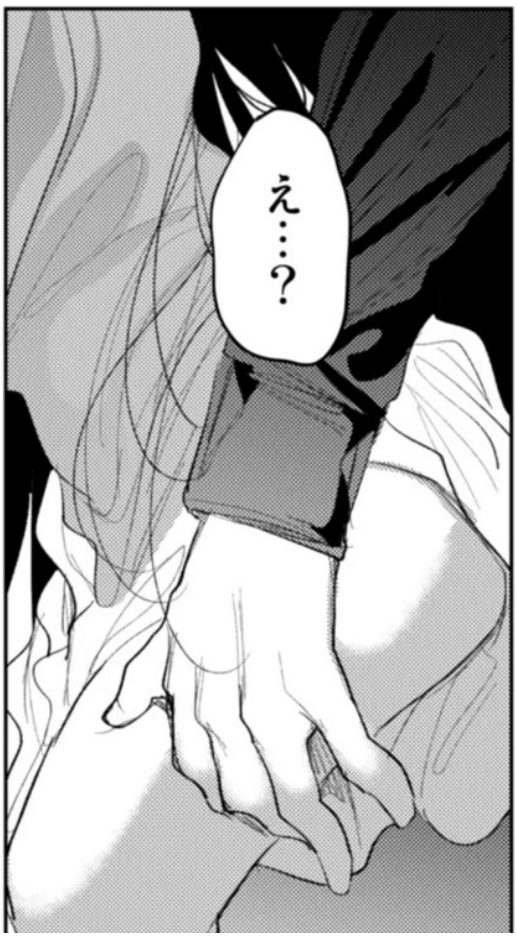

ごめんね
今日から
気を付ける
から…
それと…


軽く説明
しよっか


っ!?

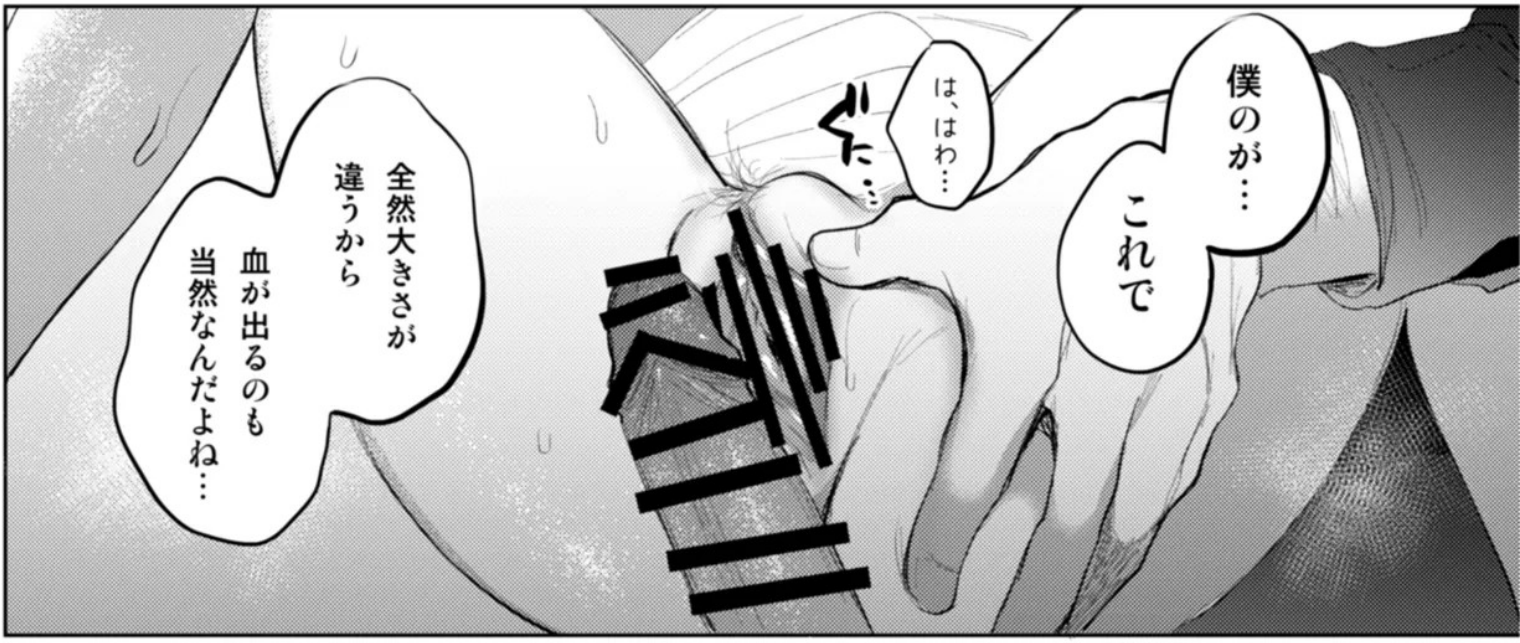

と、撮るのは
ちょっと!
あっ!
これ鏡の
代わりで!

うち置き鏡なくて…


え…?

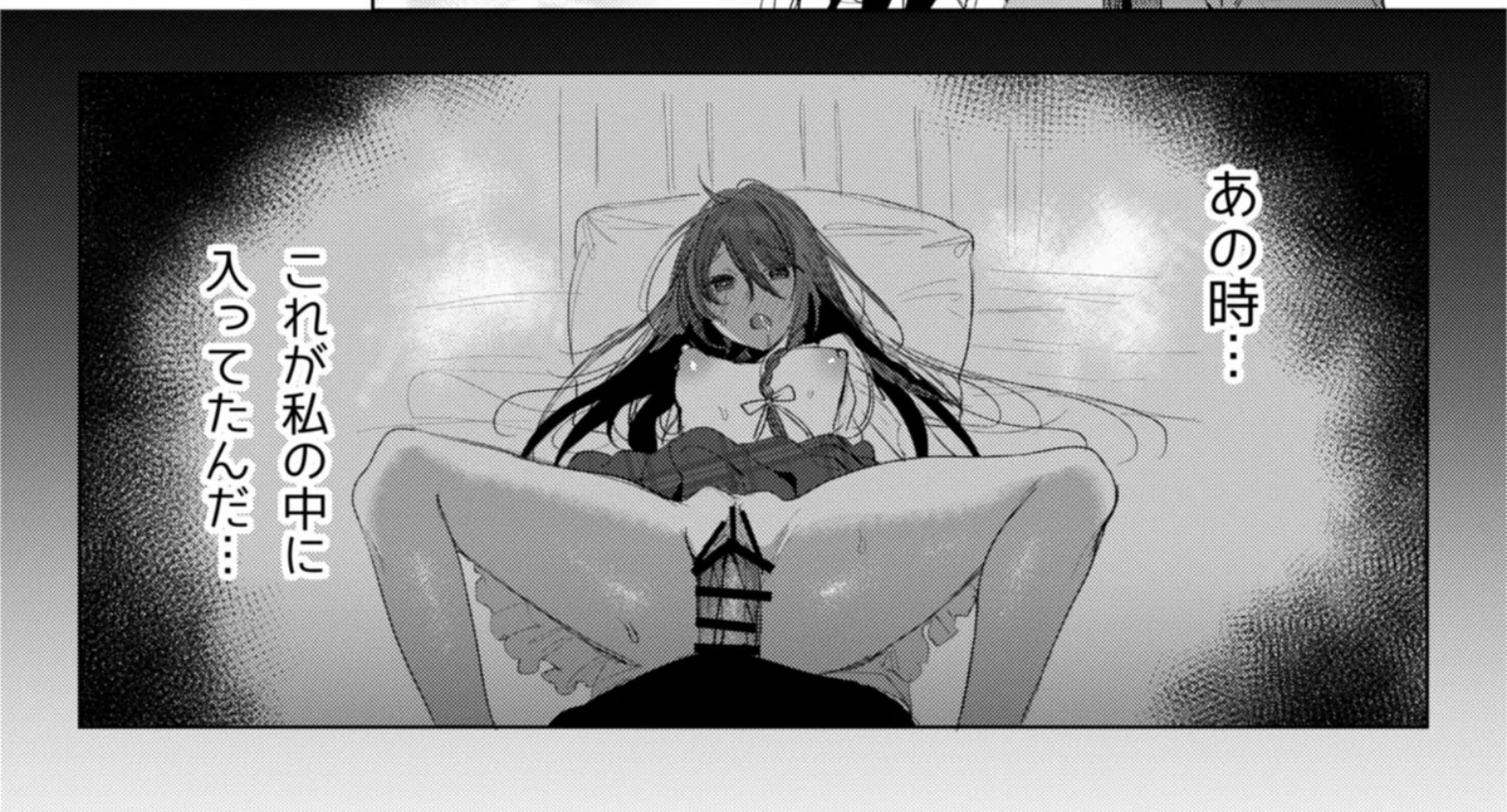

保健の先生タ～イム
性教育の課外授業で～す
しゅるるる…
せ、先生…っ
よっ…
ずるっ…
反応かわいいな…
いかんいかん…って
えーっと…


ひや
ここが
患者さんの…
えー…
…膣口
男性器を
入れる場所


僕のが…
これで
は、はわ…
ぐ…
全然大きさが
違うから
血が出るのも
当然なんだよね…


せ…
ドキドキ
先生
本当に
保健の先生
みたい…
…そうだよ？


でも
そっか…


あの時…
これが私の中に
入ってたんだ…


だから
ドキ


患者さん
どっちにする？
ガリ…
どっち…？


入口を広げるか
潤滑を良くするか
という感じ
なんだけど…
カチ


……
流石に痛そう…
ヴヴ


入口を広げるってどうするんだろう
引っ張る…？
棒状の何か
それとも器具…とか？
ぼんやり…


潤滑を良くするのは
なんかヌメッとしたものを付けたりするんだよね…？
ゼリー？ローション？だっけ…
じゃあ潤滑を良くする方で…
少女漫画と小説の知識のみの性知識


分かった
スッ


トン


へ


ビクッ
！
きょっ
ふ…
ふ…
な、何をして…っ！
潤滑を
ぺろ…♡
ぺろ…
ぺろ…
つ♡
良く…しています
何で敬語
あ…っ
ちゅ
嫌ならやめるけど
ぺろ
ぺろ
ちゅ
この方がいいかなって


僕が今
咥えてる
ここ
ちゅ…っ
陰核…
クリトリス
ちゅうううっ
を刺激
すると
気持ちいい
らしいん
だけど
ひぁぁ…
何…これ…っ
男の
僕じゃ
よく分から
ないからな…
お腹の奥
変…っ
ゾクゾク
して…っ
はっ…♡
はっ…♡
変な
感じする…っ
24


ひゃあああっ♡
どう？
気持ちいい？


はぁ♡
はぁ♡
はぁ
気持ち…
いいですけど…
声…っ
出ちゃ…っ
大丈夫…
だと思うよ
ここ防音
しっかり
してるから
ふ〜…
そろそろ
いいかな
ぱっ♡
ぷっ
ぷっ
ぷっ
ふ〜…
ふ〜…っ
うん
スムーズに
入ったな…
指一本…
ぷっ
ぷっ
ぷっ…
うぁ…


このまま二本目…
…よし
ぬちゅっ
まだ若干キツいけど…
これなら血は出ないかな
って感じだけど…
入れてもい〜い？


辛くない？
はー…
…
？
大きさ…？
はー…
はー…
もう全部入って…？
あ…っ
はい…っ
もしかして先生…ゆっくり入れてくれたのかな


ならよかった


ちゅう…
あ♡


もう少し
動くよ…
ギッ…ッ
ぷっ…
ぷっ…
あれ…
ふっ…
ふっ…

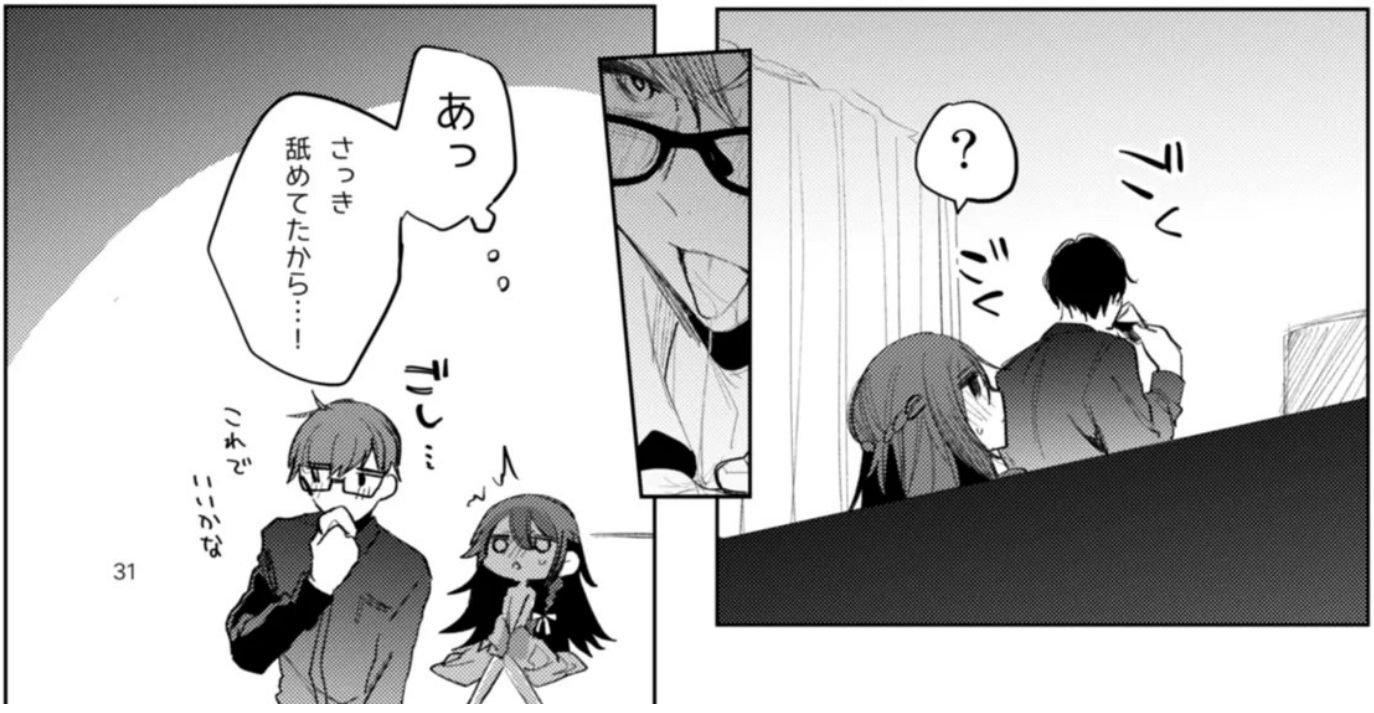
なんか
前より
ぷっ…っ
ぷっ…っ
ぷっ…っ
あっ…
ゾクゾクッ…


気持ちいい!?
ぷっ…
ぷっ…
ぷっ…
ぷっ…
ぷっ…
あっ…
ふぁっ…


あの時は
いっぱい
いっぱいで
よく
わからないまま
はじまって
よく
わからないまま
終わってたけど
今日は——
よだれが…
あ……
はー…
はー…
ぐぐっ…
そういえば
まだ…
ぐぶ…


せ、せんせ…
んー…？
キ、キス…
ドキ…
したい…です


あ～…
ちょっと待ってね


？
ゴソ
ゴソ
あっ
さっき舐めてたから…！
。。。
ゴシ…
これでいいかな


キス
おねだりするの
ピュアで
かわいい～…
きゅん…
先生…
好き…
ちゅ…
ピカッ
あ…
患者さん
ごめん…
我慢
できない…
ぐり…
私…
あ…
ぐぷっ…
32


先生に私を
求められて
はっ
はっ
なっ
ぱっ
ぱっ
ぱ


先生
パン
パン
パンッ
パンッ
パン
はっ
せんせ♡
おに
あ
ぐちゅ
ぐちゅっ
ぐちゅ
先生…
あっ
先生…っ♡


——好き…


患者さんがかわいいから…
すぐ出ちゃった…
先生かわいい…
キャハ…


うれしい
うれしい
なあ…
患者さんと
付き合えて…


そ、
そんなに…？
そうだよ
うれしいですが…


サラ…
だからね


すごく
さみしい


付き合ったのに
「さみしい」？
また家に
来てくれる？


も、もちろん
ですよ
先生さえ
よければ
よかった
絶対だよ？
あれ…


先生のお家に
行くのはいいんだけど…
先生と
付き合ってること
迂闊に
バレないように
気を付けないと
見つかったら大変…
先生だって
この関係…
バレたら困るって
分かってると
思うんだけどなぁ
お。


先生って
結構
寂しがりやさん
なんですね
ピク…

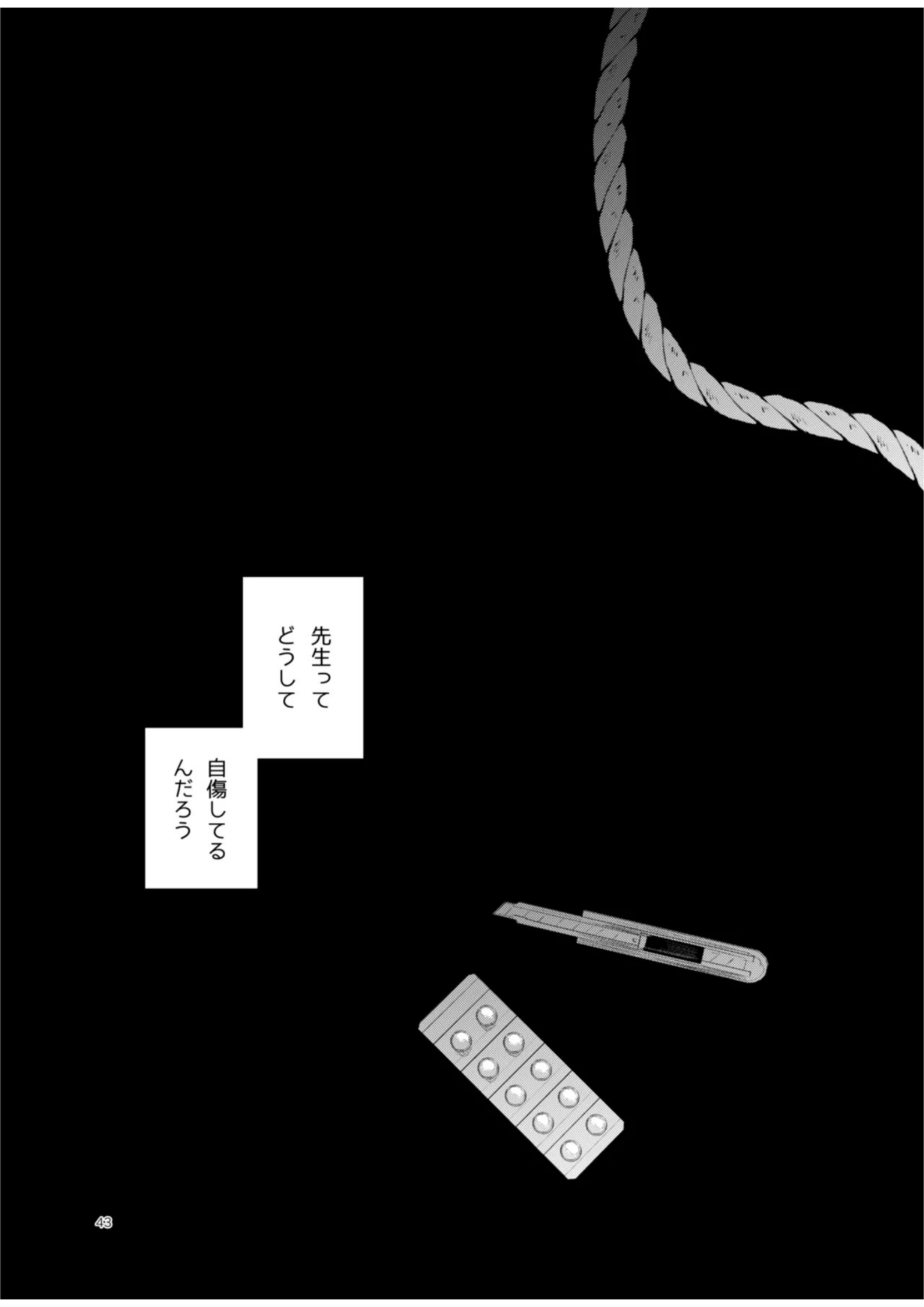

…


誰もいない中で
一人なのと
誰かがいる中で
一人なのとじゃ
わけが違うでしょ？
ああ
そうか


これで
もう一人じゃ
ないんだ…


私
何か…


大事な
ことを
好きだよ
患者さん…
見落としている
ような——


先生って
どうして
自傷してる
んだろう



患者さんと先生本4冊目でした。
次は旅館本かファンタジーパロ本か
保健室本を作りたい…。作りたい本いっぱい！

そして今回、デザイナー様に
タイトルロゴを作っていただきました。
machi様、ありがとうございました…！
ゴシック調でかわいくて気に入っております。

発行　a.m.
発行人　御膳
2024年8月 COMITIA149　初版発行
印刷　栄光様

nakahashimizuki@gmail.com

twitter（X）@am_is_gozen
pixiv 3896141

患者さんと先生

～幕間にやり直しを～

a.m. 御膳



2024/08/18 COMITIA149


パンダも猫も
大体一緒だよね～
「大熊猫だ～」
―千代


ほぁ…
びっ
美人…!!
おぢさ…
おぢさ
ぇぇ…
フッーの顔だよ…
フフ…
死刑執行の時って
目隠しされる
らしいけど
今思い出す
ことではないよね〜
言わないで
おこ
でも、それに倣って
今度手錠を付けて
もらうのもアリか
思わず後ろ手に
な、なにするこ…
この後、約20分程
放置される男


おふろつっこさん
おーん
患者さん
患者さん（ガチ）
～～～
ラプンツェル子さん

おねだり

「患者さん、もしかして熱でもある？　舌…すっごく熱い」
「せんせ……っ、せんせぇ……っっ」
簡単な受け答えもままならない。無我夢中で先生の首に回している腕に力を入れて舌を絡める。
「……のめり込んじゃってるな。あ～～～……かわいすぎ。我慢できなくなる。あんまり締め付けてると、抜けなくなっちゃうよ」
先生は私の背中をぽんぽんと軽く叩いた後、優しく撫でた。
「外に、出せなくなるから、お願い……一回ちょっと体の力抜いて……」
保健室のベッドでセックスをするのが、コンドームを付けずに「生」でするのが、脳みそが痺れて何も考えられなくなるほど気持ちがいいのだろう。
普段からピルを飲んでいて本当によかった。簡単に「悪い子」になれる。
「せんせぇ…っだして…っ！　出して出して出してぇ…っ」
「……ッ!?　ちょっと待っ…っ！　患者さん…っ！」
思わずお腹に力が入る。きゅうっと先生自身を締め付けて逃さない。先生を私の中に引き摺り込むと先生の腰がびくんと一度跳ね、私の肉付きの悪いお尻を打ちつけた。
「ッん…ッッ……ッ！　…あ……っ…は……っ……」
生暖かいドロリとした液体が秘部からお尻にかけて伝っていく感覚に、私は人生で味わったことのない恍惚を覚えた。

強引なおねだり

「せ…っ先生、これ以上は……だめ…ぇ……」
「何でそんなこと言うの？」
患者さんの身体を両の腕でしっかりと抱き締めて逃げられないようにしながら一定のリズムで腰を揺すり、膣奥へと刺激を与える。逃れようとしているのか必死に腰を浮かせたり足をばたつかせているが、大人の男の力に抵抗できるわけもない。為す術もなく僕の動きに流されるままだ。患者さんの奥底に僕の先端が遠慮なくぶつかる度に、か細く鳴いているような高く掠れた喘ぎ声が僕の耳をくすぐってくる。正直たまらない。
「さっきイった…から…っ、奥、とんとんってされると、なんか…キちゃいそうで…っ…た、保てなくなります…ぅ…っ」
「僕だってイった、イかせられた」
抜こうとしたのに強く締め付けられて。いつになく強引な患者さんに面食らっていたのだけれど。
「次は僕の番。やめてって言っても止めてあげない」
「も、もしかして先生、ちょっと怒ってます…？　……っ!?　ひゃ…っあっ……っあっぁあっっ…っ♡」
「僕の、おねだりしちゃうくらいよかったんでしょ？」
打ち付ける力を強めたら、先程より一段と強く締め付けてきた。そんなにいいんだ僕の。そんなに、僕が。
「もう一回出してあげるから、逃げないで」

わがまま

「ひっうぅうぅ……っ♡　ぁぐ…っ♡　ぉっ♡　ぉぉぁっ♡♡♡　んぅうう〜〜〜っ♡♡」

幾度となく吐精し、お互い頭がどうにかなってしまっていた。

「外に出す」なんて考えはとっくにゴミ箱の中である。気持ちいいのだから、人間の本能なのだから、仕方がないじゃないか。求められているものを与えて何が悪いんだ。もう一度深く抉り込み、空っぽになるまで奥に放つ。

「っんぁっ…っ♡　ぁあ…っっ♡♡　ひぁあぁあぁぉっ♡」

「そんなに声出るほどいいんだ？　これ……」

患者さんの嬌声が保健室の外に響かないよう深く唇を重ねる。

「……〜〜〜っっ♡♡　ちゅっ♡　ちゅうぅっ♡　ぅあぁ…っ♡　んんぅっ♡　ぷはっ…っ♡　せんせっ♡　せんせぇ……っ♡　ごめ…っ♡　ごめん…なさいっ……っ♡　ごめんなさいぃっ…っ♡　声出て…っ♡　おねだり、して…っ♡…わっ、わがまま、言って…しまって……っ♡」

どうやら火に油を注いでしまったらしい。膣内を上下にうねらせまた僕の身体から搾り取ろうとしてくる。普段は大人しく淑やかでいやらしさを感じない、まだまだ発育途上の少女だというのに。一皮剥けば既に女性として完成されているのだから驚きだ。

「…あぁは言ったけど。患者さんにわがまま言われるの嬉しいから、いいよ」

僕は患者さんの小さな背中を優しく撫でて抱き寄せた。

「だから僕のこと、ずっと必要として」

当てる

「先生っ……当たってる……っ」
「ん～……？　何が～？」
どうか、とぼけないでほしい。
先生の履いているデニムと私のスカートの布地を貫通しかねない硬さを持ったそれが、私の下腹部を無遠慮に押し付けていた。先生の体重がかかっていることもあり、それこそ挿入されている時のような圧迫感がある。「怒張」なんてよくできた表現だと思う。こんなに張って…痛く、ないのだろうか。
「お、男の人ってキスしただけでこうなるんですか…？」
生徒が突然保健室に入ってきてもおかしくないお昼休み。いくら何でも事を始めるわけではないと思うのだけれど、心配になってしまう程の強張り加減だった。
「……興奮しないわけないでしょ、好きな子にキスしてるんだから。患者さんは興奮しないんだ？　微塵も」
「う……」
そう問われると、完全には否定できない。先生は返答に窮している私をニヤついた目で見て、スカートの裾に手をかけた。
「言葉で教えてくれないなら、実際に確かめてもいい？」
「ぜ、絶対にダメです!!」
「確かめてみて、患者さんが僕と同じくらいに興奮してるって分かったら……うれしいのに」
今見られたら、触られたら、先生に「押し付け」られ火を着けられたことがバレてしまう。それを知った先生はきっと、一段とニヤついた目で私を見てくるのだろう。

猫のよう

放課後を告げるチャイムが鳴る。患者さんはまだ起きてこない。
「患者さん」
一声かけても応答はなかった。渋々ベッドカーテンを開けると、そこにはベッドの上で綺麗に丸まった――さながら猫のように丸まった患者さんが寝息を立てながらスヤスヤと眠っていた。
「あらかわいい」
うっかり女性的な口調になってしまった。
「困ったな……」
起こすのも躊躇うほどの猫らしさだ。
本物の猫であれば体全体を抱き抱えて別の場所に移すこともできるのだけれど。患者さんは小柄で細身な体躯とはいえ、僕は易々と少女を担げるほど屈強な人間ではない。
「……う～～～ん」
とりあえず、頭を撫でてみたり。
「ん……」
頭から肩へ、肩から背中にかけてゆっくりと撫でる。心なしか患者さんの表情が穏やかになっていく。猫も背中を撫でられると気持ちよさそうに喉を鳴らすものだ。そのまま背中から腰を撫で、腰から臀部に差し掛かりそうなタイミングで、急に患者さんの目が開いた。慌てて手を離す。
「…先生、悪い顔してますね。何かイタズラしてませんでしたか？」

飲むの？

「んっ……っ……!!」
患者さんは僕のモノを頬張ったまま離さない。もういいよ、という合図のために背中をトントンと叩くとようやく口を離した。
「えぅ」
すると、よだれと白濁した液体が患者さんの口元から垂れてしまった。
「あっ！　ごめ、ごめん患者さん…!!」
思わず謝る。そうか、だから口を離せなかったのか。しかし患者さんの表情は至って冷静だ。
「あも、ほれって……ろんれもらいじょーぶ、らんですか」
「の、飲んでも害はない……と思うけど、おいしくないだろうからぺってして！」
慌ててティッシュを数枚取り患者さんに手渡そうとするも、ごくんと飲み込んでしまった。
「あっっっ!!」
間に合わなかったのか興味本位で飲んでみたのか、僕が抜き取ったティッシュは使われることなく患者さんのスカートめがけてはらはらと落ちた。
「ん……先生が喜んでくれたから、つい飲んじゃいました」
そう言われると何だか照れるものがある。
「ふふ……もっとお口で、してあげましょうか？」

先生の体が動く度にぷちゅ、ぷちゅと水音が漏れる。
完全に抜き切ってまた挿入してを繰り返されていく内に「穴」の空いた部分に溜まった空気が下卑た音を否応なく立てるので、私は堪らず目をぎゅっとつむり恥ずかしさに打ち震えた。
「普段大人しくてか弱くて、線の細い患者さんから聞こえる音とは思えないな」
「い、言わないで…っ…ください……っ」
先生は私をからかったわけではなく、純粋に思ったことがただ漏れ出ただけなのだろう。それこそ、先生はこんなこと慣れっこなのだろうけれど、私は……。
「空想の中で抱いていた時とは大違いだ。現実は何もかも超えてくるね」
「抱っ……!?」
今、聞き捨てならないことを聞いた気がする。
「しまった」
「どどういうことですか、先生」
「……言葉通りの意味だよ。は、恥ずかしいから、もう掘り返さないで」
「そんなこと言われたら尚更気になっちゃいますが…!?」

音

びゅるるっ♡どくっ♡どくっ♡びゅくっ…っ♡
（あっ……またっ…中に、キて……っっ♡）
先生から放たれた精液が勢いよく私の身体の中に流し込まれてゆく。ただでさえ容量の少ない小さな器だ。簡単に決壊してまるで粗相をしたかのように太ももに、お尻に、スカートに垂れていった。
子供の作り方は授業で習っていたし、少女漫画やえっちな小説でも描写されていたから、決して無知ではなかった。年相応の知識はある。何なら、耳年増と言われても強く否定はできない。
（でも…っこんな…っ♡　こんなのって…っ♡　ぁあぁぁ……っ♡）
知る由もなかった。授業で学んだこと、絵や文で知っていたことと現実の感覚がこんなにも乖離しているなんて。
（覚えちゃ、ダメ…っ…っ♡　こんな、こんな……っきもちいいの…っ♡♡）
（戻れなくなるっ…っ♡　戻れなくなって、私、普通じゃ、なくなって……っ♡）
――ああでも。普通でいられないのなら、いっそ…。
（それでも、いいのかも……♡）

決壊

飽きることなく何度も何度も抽挿と射精をねだり、数度目の絶頂を迎えた頃。
先生も私も体力が尽きて、文字通り精も根も尽きて、身動きが一切取れなくなってしまった。当然の帰結だ。体は絡んだまま、愛液も精液も流れ出たまま、重力に逆らうことなくベッドに体を預ける。言葉を交わさず、息を整えるだけで精一杯のまま数分が経ち、ようやく先生の口が小さく開いた。
「……大丈夫？」
「た、多分…？　制服とシーツが終わってしまった気はしますが、それ以外は何とか。せ…先生も、大丈夫……ですか？」
私の体に回していた先生の腕がぎゅうっと締まる。
「夢みたい」
「え？」
「大丈夫なのかな、僕は」
今にも泣き出しそうな顔をするものだから、私も負けじと先生を抱きしめ返した。
「……大丈夫ですよ、大丈夫です」

おしまい

「前、失礼します…ね」
その声と共に視界が暗くなる。目隠し用の黒い布が僕の瞼の上にゆっくりと乗り、後頭部の中央できゅっと結ばれた。遮光性が高い布ではないから薄らと光が漏れてくるのだけれど、メガネをしていないこともあってか辺りはよく見えない。目隠しとしてきちんと機能していた。
「は、背徳感がすごい……」
布を結び終えた患者さんの一言で思わず吹き出してしまいそうになったが、そこは堪えた。つい先日、君も全く同じ格好だったんだよ。
「手も、結ぶ？」
僕は、自然に後ろ手になっていた腕をぶらぶらと上下させる。患者さんの姿は見えていないが、声のする方向からして恐らくまだ背後にいるのだろう。身じろいだのか衣擦れの音が微かに聞こえた。
「そ、そこまですると、その、可哀想……」
動揺していたようだった。可哀想……？
「どうしてそう思うの？」
「ざ、罪人、みたいで」
「じゃあ僕にピッタリだね」

目隠し

攻めるのは好きだけれど攻められるのは苦手だ。
ふとしたタイミングで、心構えもしていない時に終わって、もう次はないんじゃないのかと見捨てられたような寂しい気持ちになるのが目に見えているから。
――だからといって。
「患者さん……どうしたの？」
目隠しを着けてから体感で数十分程経過した。僕は、ものの見事に放置されていた。
「あ……っ」と小さく驚いた声が聞こえて、ああよかった、まだそばにいたのだな、と安堵した。それ程までに、患者さんの声も動きも察知できなかった。馬鹿正直に目隠しを着け続けずとも、手は拘束されていないのだから外して確認すればいい話なのだけれど。
「何をすればいいのかと考えていましたが、その……」
「好きなことしていいよ。僕は抵抗しないから」
少しの間が空き、「じゃあ」との呟きが返ってきた。
なんだ遠慮していたのか、微笑ましいな。そう思っていたのだけれど。
「…っちゅうぅ……っじゅるるぅう…っ♡」
「ひゃあぁあ!?」
突然左耳を犯され、情けない声が出た。
「視覚をシャットアウトするとその他の感覚が鋭敏になる……と先生が貸してくれた本に書いてありましたが、いかがですか？」

目隠し2

七夕

学校の玄関前に設置されている笹には既に数えきれないほどの短冊がぶら下がっていた。先生はそれを一つ一つ手に取って眺めては口元を緩ませる。しばらく眺めて気が済んだのか、先生は私に視線を向けて微笑みかけた。

「願い事、何にするの？」

私と先生の手には油性ペンと鮮やかな色の短冊。お互い、七月七日になるまで短冊に願い事を書いていなかったのだ。

登下校時と昼休み時には七夕コーナー前で生徒がごった返していたので、非力な私は近づきさえしなかった。なので、殆どの生徒が下校しているか部活動に勤しんでいる夕暮れ時に、こうしてようやく書けるようになった、というわけで。

「健康にいられますように…ですかね。ベタでしょうか」

書いた短冊を先生の目の前に出した途端、いつものように

「あはは」とカラッと笑われた。ベタだったらしい。それか、私の考えることはお見通しなのかもしれない。自分の中で一番大事なことなのだから仕方がない。

「先生は何にするんですか？」

「大切な人とずっと一緒にいられますように、かな」

「……私もそう書けばよかったですね」

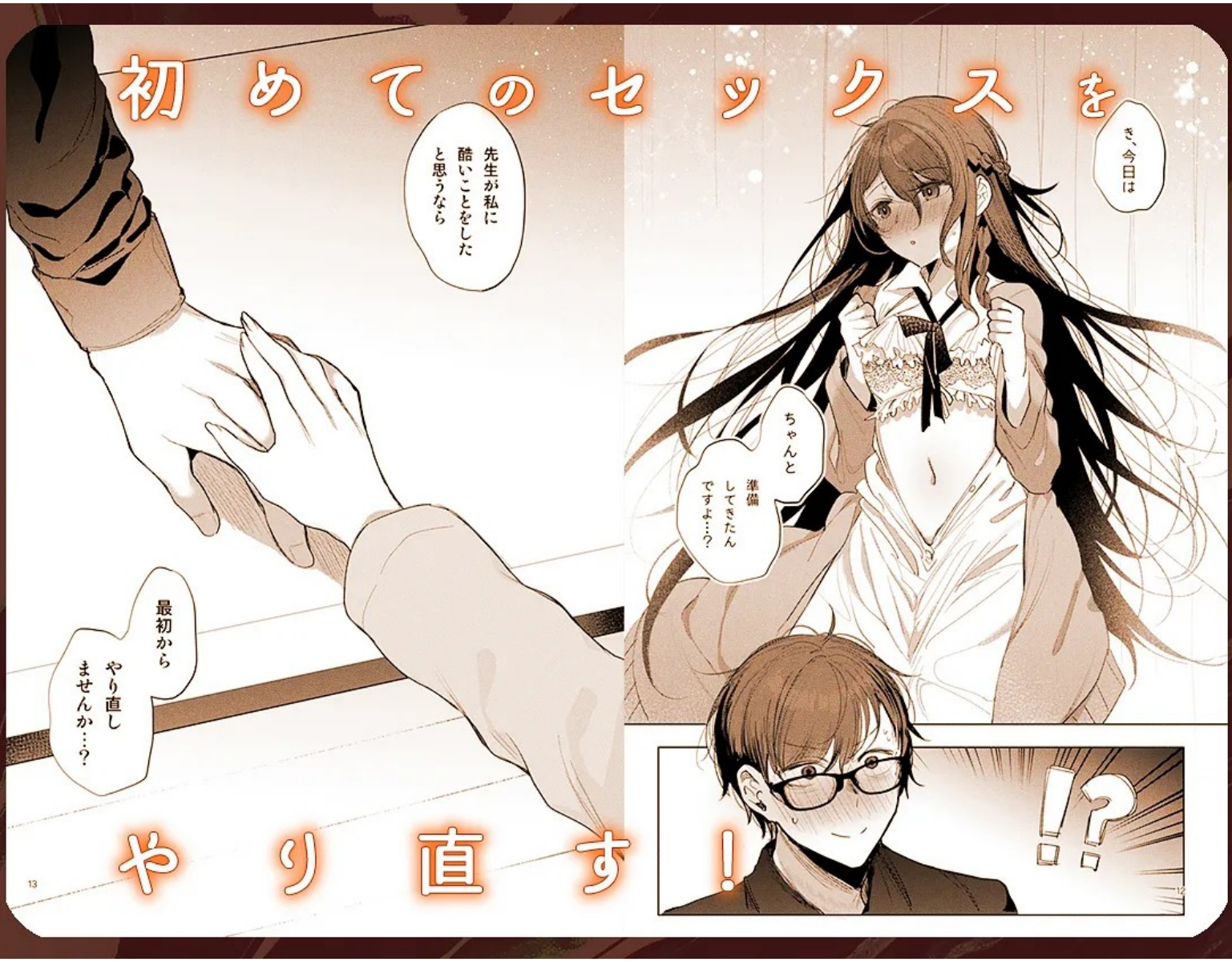
「患者さんの健康あってこそだから、いいんだよ？」



SS名刺メーカー / Photo by Jeremy Thomas on Unsplash


メンヘラヤンデレ弱々保健医x病弱貧乳敬語女子
46P
+ex
保健室の常連・病弱女子「患者さん」
×
自己肯定感の低い保健医「先生」
R-18
adult only
a.m./御膳
Patient and School nurse
患者さんと出会
~春間にやり直しを~
——これでもう一人じゃないんだ


保健室で一件があった数日後。
いらっしゃーい
先生
名前：石流 竹千代
お
おじゃまします…
私服だ
先生は患者さんを家に呼び、
今後の「お付き合い」
について話し――
話そうって言われてたけど
一体何を…？
もしかして別れる…？
ドッ
ドッ
つ、付き合えて嬉しいって思ってるけど
ええと
これがマズいこと
…ってのも当然分かっていて…
私がいいからいいんです
酷いことをされたなんて思ってもいません
いいんです
私だって
先生のことが好きですから！
患者さん
本名：笹五位 月子
――二人は正式に付き合うことに。


初めてのセックスを
き、今日は
ちゃんと準備してきたんですよ…？
!?
12
先生が私に酷いことをしたと思うなら
最初からやり直しませんか…？
やり直す！
13


保健の先生による
性教育えっち♡
もしかして
僕に見せるために
かわいいの
選んできたの？
ぎゅ…
ぁあ…
はい…
もしかして
私
狭い？
のかなって
わた
痛みは
感じな
大丈夫
組
無理矢理
入れたんだな
僕
保健の先生
タ〜イム
しゅるるる…
せ…
ドキドキ
先生
本当に
保健の先生
みたい…
…そうだよ？
入口を広げるか
潤滑を良くするか
カキ
という感じ
なんだと…
患者さん
どっちにする？
な、
してぺろ…♡
ぺろ…
ぺろ…
嫌なら
やめ
ちゅ
ぷっ


さいしょからさいごまで生で
このまま二本目…
まだ若干キツいけど…
…よし
これなら血は出ないかな
って感じだけど…
入れてもい〜い？
いちゃらぶえっち♥


救ったり救われたり、救われなかったりする、
寂しがりやさんなんですね
誰もいない中で一人なのと
誰かがいる中で一人なのとじゃわけが違うでしょ？
私
何か…
患者さんと先生の歪んだ幕間。



